

『日本の書』展

～ハノイ大学・日本文化センターにおける書作品個展～

平嶋 一臣

Exhibition of Japanese Calligraphy

～One-Man show in Hanoi University Japanese Culture Center～

by

Kazuomi Hirashima

1 はじめに

「日・越国交40周年及び福岡県・ハノイ市友好都市提携5周年を記念し、『日本の書』展をやってほしい」

今春、私はそのような個展の打診を受けた。会場は国立ハノイ大学内にオープンする日本語・文化・教育促進センター（通称、日本文化センター）で、それを記念してということだ。会期は8月29日から9月5日までの8日間。

この話を受けることに躊躇はなかった。なぜならば、書の古典研究をベースに、現代にも通じる新たな創作を発表し続けていきたいと考えていたからである。とはいえ、裏打ち・表装・額づくり・搬入・搬出と、毎度自前でやることにしている私にとって、海外での展覧会となると、やはり勝手が違うことも予想はできた。特に、メインとなる大作のパネル仕立てを、いつ、どこで、どんな方法で行うのか、そのための工具や材料の調達は現地で可能なのか。また小さく収まる軸装作品はともかく、額装作品の飛行機輸送に問題はないのか、それに加えて税関手続きは？・・・等々、オープンまで不安は拭えなかった。

そのようなこともあり、今回の企画をされた交流協会のみなさんや会場づくりを担当される現地スタッフの方々には、緊張が絶えなかった。しかし、何事も楽天的に考える私は、『何とかなる』の精神で構えることにした。スタッフの方々へは、「あまり心配しないで下さい。形ある物、いつかは壊れます。途中で作品が傷んだらその時に考えましょう。やれるだけのことはやりましょう、何とかなります。毎度のことですが、時間が経てばちゃんと終わってますから・・・」と、少しでも気をほぐしてもらおうよう話しかけたものだった。

日本出国までには作品梱包にあれこれと迷ったり、ヴェトナム入国の際には、ハノイ空港で不審物検査に引っかかったり（径30cmほど塩ビパイプに大作をぐるぐる巻きにして入れていたのが、どうやら兵器と疑われたようだ）と、いくつかのトラブルはあった。しかしそれもなんとかパス。荷物も私も無事、灯りもわずかになり始めた深夜のハノイの街に入ることができた。

以下は個展会場と今回の作品、それに一部分ではあるがヴェトナムの紹介である。

受理日：平成25年11月1日

純真短期大学こども学科 特任教授

2 今回展のポスター



ヴェトナム語版



日本語版

3 会場風景



日本文化センター開所式



会場第1室



会場第1室



会場第2室

4 作品



メイン作品『翔』（140×210 cm）空海・『風信帖』中の『翔』を、現代書風に試みる



古代象形文字『身』
（妊婦の立ち姿）



古代象形文字『豊』
（高坏に収穫物を入れた姿）



『光』



『きみがため春の野に出で…』光孝天皇作



『和敬清寂』(茶席の言葉)



『五風十雨』



和紙ブラインドに『飛』



軸装仕立ての現代書『雲』



ヴェトナム語作品『núi (山)』



篆書作品『越日友好』



和紙ブラインドに『思無邪』



『竜虎』



『躍進』



『しろがねもくがねも玉も...』



『前衛的な書を試みる・『さくら』』



『きみがため春の野に出で…』



『翹首望東天…』(阿倍仲麻呂作)



『天の原ふりさけ見れば…』



上の2つは、在唐35年の天平勝宝4年(752年)、ようやく皇帝の許可が下り、仲麻呂が、日本への帰国が叶う喜びを漢詩と和歌で作ったもの⁽¹⁾。和歌の方は、百人一首でも知られる。しかし、仲麻呂の乗った船は、東シナ海で暴風雨に遭い漂流。安南(現在のヴェトナム)に漂着する。安南で3年ほど滞在した後、755年再び唐の都・長安(現在の西安)に帰る。16歳で唐に渡った仲麻呂は帰国ができないまま宝亀元年(770年)77歳で没。左は、私がかつて中国大陸横断の旅をした折、西安で買い求めた仲麻呂記念碑の拓本。『満月を眺め日本を偲ぶ仲麻呂の姿と漢詩・翹首望東天…』が、草書で刻されている。



色紙作品『こころと心』



色紙作品『喫茶去』(茶席の言葉)



扇子小品『無一物』



小品を展示した棚



短冊『この道や・・・』(芭蕉作)



扇子小品『平常心』

5 会場での作品説明



オープンを前に、先生方へ作品解説



来訪した日本語学部生に、阿倍仲麻呂の詩を紹介し、古代における日越交流を説明

6 日本語学部2年生に、書のデモンストレーション



みんなの熱心な目・目・目



7 書の実技指導



指導をしっかりと受けとめ、堂々とした書きっぷり



半紙に好きな言葉を書きました



半紙に希望の言葉を書いてあげました



4年生のホアンさんは、小筆で阿倍仲麻呂の漢詩を見事に写し取る

8 会場で出迎えて下さった方々



ルアン・ハノイ大学学長と



タン・国際交流センター長と



トアン・日本語学部長と



オープンの式典を手伝って下さった
日本語学部4年生のみなさん

9 ハノイ大学風景



ハノイ大学・外国語学部棟（3階に、日本文化センターや日本語学部の教室がある）



外国語学部棟の8階から、大学
キャンパスとハノイ市街を遠くに望む

10 おわりに

9月5日木曜日、個展は無事に終了。帰りは身一つで何もかも軽かった。帰国後、ゆっくりと振り返りながら、私として今回展は成功だったのではないかと考えている。それは、ハノイ大学の日本語学部生約 550 名(各学年定員 150 名、4 年生のみ定員 100 名)に加え、他学部の学生たちも交じり連日熱意ある訪問を受けたことに助けられたからだ。また、落成した日本文化センターを大学挙げてホームページ等で紹介して下さったこと⁽²⁾や日越文化交流協会の方々の温かい応援もあった。

振り返ると、日本とヴェトナムの交流の歴史は長く深いものがある。

古くは、阿倍仲麻呂(中国名は晁衡・698~770)の安南都護府(ハノイにあった)総督として5年間の滞在がある。つまり、彼は帰国船が安南に漂着の後一旦長安に戻るのだが、皇帝の命を受け再度安南を訪れ、今回は安南を治める長官として赴任したわけである。仲麻呂と安南との縁の深さを感じる。

また、中世から近世にかけては、東シナ海を雄飛して渡っていった日本商人のヴェトナム移住(駐在?)があった。先年、町全体が世界遺産に登録されたヴェトナム中部の都市ホイアンには、当時日本人町もあり 100 名のほどの日本人が常駐するという賑わいであった。この日本人達はホイアンを拠点に、さらに南のジャワ・フィリピン・タイへと交易を広げていった。ところが、日本に鎖国体制が敷かれると、これらの人々の中には、日本への帰国も叶わず、そのままこの地で余生を送った者も多いという⁽³⁾。

近代においては、1900 年前後から抗仏反植民地闘争に立ちあがったファン・ボイ・チャウ(1867~1940)の日本亡命がある。それを陰で支えたのも日本政府の中核的人物であった。しかし、時代は昭和の軍閥時代へと移り、東南アジアにも暗雲が垂れこめていくことになる。第二次世界大戦のさなか日本軍の中越侵攻により、この時期ヴェトナム国民の対日感情は悪化していく。

やがて、第二次世界大戦は終結。しかし、ヴェトナムに平和が訪れるのはまだ先のことだった。そこには、長く暗く泥沼化していくヴェトナム戦争が待っていた。長期にわたったこの戦が終わると、国を挙げて新国家建設に着手する。その時彼らが復興の手本としたのは、同じく戦後の疲弊した国を持ち前の勤勉な国民性で見事に立ち直らせた日本だったという。

期を同じくして、日本も ODA を中心に国家を挙げて、経済力と技術力による支援を積極的に行ってきた。その最大の支援プロジェクトがインフラの整備であり、これは今も続いている。加えて最近では日本企業の進出もめざましく、ヴェトナム経済復興を市民目線で支えている。平和国家建設の下、現在ヴェトナムの人々は極めて親日的である。

資源国ヴェトナムと技術立国日本とのつながりは、今後ますます深まっていくことはあっても後退することはないであろう。

そのような時期に、ささやかなイベントではあったが、「日本の書」を通して日本文化の一端を、未来を担う多くの若者に見てもらったことは、私としても嬉しい限りである⁽⁴⁾⁽⁵⁾。今後、両国の交流がさらに深まり、日本語学習に燃えているヴェトナムの若者が、希望している日本留学をはじめ、日本を学ぶ機会がさらに広がっていくことを願うばかりである⁽⁶⁾。

11 註

(1) 仲麻呂の作った望郷の漢詩は「翹首望東天 神馳奈良邊 三笠山頂上 思又皎月圓」
読み下し文では、「翹首東天を望めば神は馳せる奈良の辺 三笠山頂の上を思えば
又皎月は円なり」となるうか。

(2) 会期中、大学から出されたホームページ（一部分）。日本文化センターのオープンを知らせている。

The screenshot shows a website for the opening of the Japanese Cultural Center in Fukuoka. The main heading is "Khánh thành Phòng Văn hóa - Ngôn ngữ và Phát triển hợp tác với Nhật Bản". The text describes the event on September 26, 2013, at the Fukuoka University of Education. It mentions the presence of the Japanese Consul General and the Japanese Cultural Center in Fukuoka. There are several columns of text, including a "LIÊN KẾT NHANH" (Quick Links) section with buttons for "HỆ TOÀN", "KIỂM TOÁN", "TÀI CHÍNH", and "BBU/ACCA". Below the main text are three photographs: a lecture, a group photo, and a meeting room. At the bottom, there is a footer with contact information and a logo for "TRƯỜNG ĐẠI HỌC ĐÀ NẴNG".

(3) ホイアンの旧市街と来遠橋 (通称・日本橋)



かつて海のシルクロードの一拠点でもあった
ホイアンの町



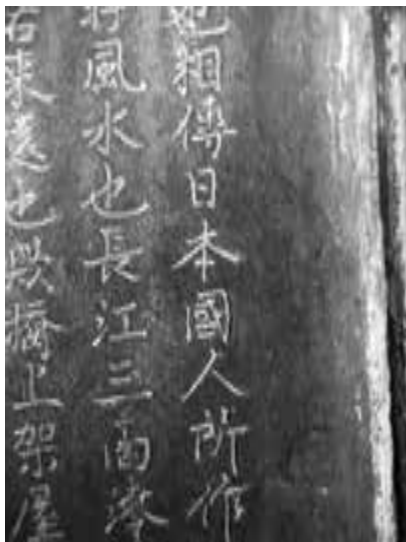
ホイアン旧市街の発掘では、
日本の伊万里焼も発見されている



1563年、ホイアンの日本人によって架けられた『来遠橋』
(遙か遠い所から来た人が架けた橋の意。通称『日本橋』)



橋の入り口に掛かる扁額



橋を渡るすぐ右脇に、その昔日本人が架けた橋であるとい
ういきさつが漢文で書かれている。この橋は、今もホイア
ンの人々の生活を助けている



日本橋を渡る中央部からホイアンの町を見る

(4) 2012年の統計によると、ヴェトナム国民の平均年齢は28.2歳である(日本国民は

45. 4歳)。

(5) 今回の作品の内、小品はハノイ大学の先生方に貰っていただき、額装・軸装・パネル作品は、そのまま文化センターに置いてきた。今後入学してくる日本語学部生にも、引き続き見てもらい、日本(語)学習の参考になればと考えたからである。

(6) ヴェトナムにおける日本語学習について

1990年代初めは、ハノイ大学とハノイ貿易大学の2校だけで日本語を教えていたが、現在ではヴェトナム全土で39の大学に広がっている。また、日本語学習者も1993年の3000人から2009年には44000人に増えている。2005年にはハノイ、フエ、ダナン、ホーチミンの4都市の中学校で日本語が第一外国語となる。

2 参考図書

- 飯島稲太郎編『空海・風信帖』書芸文化院 1970年
- 石川忠久監修『漢詩紀行(五)』NHK出版 1999年
- 石澤良昭・生田滋『世界の歴史第13巻東南アジアの伝統と発展』中央公論社 1998年
- 石村雅雄『ベトナムの2005年教育法について』鳴門教育大学研究紀要第23巻 2008年
- 猪口篤志『日本漢詩・上巻』明治書院 1988年
- 江田裕介・森澤允清・井上真友子『ベトナムの障害児教育における現状と課題』和歌山大学教育学部・教育実践総合センター紀要No.14 2004年
- 加藤栄沢訳『ベトナム現代短編集1』大同生命国際文化基金 1995年
- 加藤栄沢訳『ベトナム現代短編集2』大同生命国際文化基金 1995年
- 佐伯弘次『岩波講座・日本通史第10巻・中世4』岩波書店 1994年
- 桜井由躬雄『東南アジア史I』山川出版社 2004年
- 杉浦さやか『ベトナムで見つけた』祥伝社黄金文庫 2008年
- 高木正一『唐詩選』朝日新聞社 1970年
- 田原洋樹『ベトナム社会主義共和国の言語教育状況に関する考察』融合文化研究第7号 2006年
- 西谷泉『ベトナムの小学校教育の現状について』群馬大学教育学部紀要・自然科学編第56巻 2008年
- 南部広孝・関口洋平『社会主義国の体制移行に伴う教育変容』京都大学大学院教育学研究科紀要 2011年
- ファン・ボイ・チャウ『ヴェトナム亡国史』平凡社東洋文庫 73巻 1988年
- 三橋広夫『ベトナムの歴史』大月書店 2005年
- 宮原彬『ベトナムの日本語教育事情』長崎大学留学生センター紀要第7号 1999年
- 吉川幸次郎・三好達治『新唐詩選』岩波新書 106 1976年
- (財)日本語教育振興協会『平成25年度事業計画』2013年
- 昭和女子大学国際文化研究所編『世界遺産ホイアン展』2000年
- 世界の動き社『世界の動き・ベトナム』外務省編集協力 2008年
- 陝西省博物館編『西安碑林書法芸術』陝西人民美術出版社 1989年
- 日越友好年実行委員会『日越友好年～新しい地平線～』2013年
- ハノイ大学編『ハノイ大学日本語学部案内』2012年